

『学び合い』の授業



平成 年 月 日 ()

校時	時 間	教 科 (授業者)	学年学級
1	8:40 ~ 9:30		
2	9:40 ~ 10:30		
3	10:40 ~ 11:30		
4	11:40 ~ 12:30		
昼	12:30 ~ 13:15		
5	13:20 ~ 14:10		
6	14:30 ~ 15:20		

『学び合い』懇談会

1 校長あいさつ

2 参加者の自己紹介

3 『学び合い』懇談

I 『学び合い』取組までの経緯

平成20年度	
佐賀市教育委員会より『学び合い』の研究委嘱…小中連携での研究	
H20. 4	<ul style="list-style-type: none"> 研究主題「確かな学力」の育成を図る学習指導のあり方 ～学びの場の改善をめざして～ 全教科にて『学び合い』授業を行う。
H20. 6	<ul style="list-style-type: none"> 第1回小中合同校内授業研究会/全員学習指導案作成
H20. 8	<ul style="list-style-type: none"> 小中合同『学び合い』研修会 上越教育大学院 西川純教授講演会/ふれあい館ホールにて
H20.11	<ul style="list-style-type: none"> 第2回小中合同校内授業研究会/全員学習指導案作成
H21. 2	<ul style="list-style-type: none"> 第3回小中合同校内授業研究会/全員学習指導案作成
平成21年度	
H21. 4	<ul style="list-style-type: none"> 研究主題「確かな学力」の育成を図る学習指導のあり方 ～学びの場の改善をめざして～ …で校内研2年目スタート
H21. 6	<ul style="list-style-type: none"> 第1回小中合同校内授業研究会/全員学習指導案作成
H21.11	<ul style="list-style-type: none"> 自主公開授業研究会 記念講演：上越教育大学院 西川純教授
H22. 2	<ul style="list-style-type: none"> 第3回小中合同校内授業研究会/全員学習指導案作成
平成22年度	
H22. 4	<ul style="list-style-type: none"> 研究主題「確かな学力」の育成を図る学習指導のあり方 ～学びの場の改善をめざして～ 全教科にて『学び合い』授業を行う。
H22. 6	<ul style="list-style-type: none"> 第1回小中合同校内授業研究会/全員学習指導案作成
H22.11	<ul style="list-style-type: none"> 第2回小中合同校内授業研究会/全員学習指導案作成
H22. 2	<ul style="list-style-type: none"> 第3回小中合同校内授業研究会/全員学習指導案作成
平成23年度	
H23. 4	平成23年度研究主題 「確かな学力」の育成を図る学習指導のあり方 ～学習集団づくりをとおして～
H23. 4	<ul style="list-style-type: none"> 研究主題、研究組織、年間の見通し
H23. 5	<ul style="list-style-type: none"> 『学び合い』の授業参観週間（～5/20） 「学び合い」研修会（外部講師による研修）
H23. 6	<ul style="list-style-type: none"> 第1回小中合同校内授業研究会
H23. 8	<ul style="list-style-type: none"> 各教科の「学び合い」の状況報告 「学び合い」研修会（外部講師による研修）
H23.10	<ul style="list-style-type: none"> 第2回小中合同校内授業研究会
H24. 1	<ul style="list-style-type: none"> 佐城教育事務所『学び合い』移動教室会場/第3回小中合同校内授業研究会
〈備考〉	
<ul style="list-style-type: none"> VIEW21 vol.3 (Benesse) に東与賀中『学び合い』が掲載 『学び合い』視察…熊本市教育センター、高知市（高知）、備前市（岡山）、庄原（広島）寝屋川市（大阪）、対馬（長崎）、佐世保（長崎）、日南（宮崎） 『完全（全単元・全時間）学び合い』1年生数学・社会にて 	

II 平成23年度校内研における『学び合い』実践のための準備

1 平成22年度校内研『学び合い』実践からの声

昨年度の「学び合い」授業研究会のグループ討議の意見

○「学び合い」の取り組み状況

- ・全領域、全単元ではなく、領域・単元で一人ひとりの学力を高めるために、個と個をつなげていく。
- ・やりやすい領域（単元）とやりにくい領域（単元）があるように思う。
- ・昨年、数学、社会で「学び合い」を活発に行ったので、他教科ではスポット的に行うこともできる。
- ・場面で取り入れてよい。全てに取り入れる必要はない。
- ・美術では、発想とかアイデアを見るけど、発想は個人のものでなければならない。アドバイスは子どもたちは無理かな。
- ・教科の特性はある。テクニックは、盗みなさいと言ってもよいのでは？
- ・「不安はない」→何か知らしているの
- ・教えることはいつも教えて 教えられることは教えられるのかな
- ・国語は文法などで「学び合い」をできるが、読み取りでは「学び合い」は無理である。
- ・理科では、課題の与え方が重要である。

○教師の手だて

- ・「学び合い」に入る始めの授業で説明をきちんと行う。
- ・おさえておきたい部分は普通に授業、個別指導、ワークシートの作成、レベルに応じたプリントの準備、はじめは時間をかけて指示を出す。なれてくるとできるようになる。
- ・受験に関係ない形式を与えて全て生徒にまかせた。
- ・教師が「学び合い」に効果があるということを生徒に伝えておかないといけない。子どもにまかせないといけないから。
- ・「1人ひとりあたると教師の負担は多くなる。生徒同士だと時間が短くてすむ。」ような学び合いの良さを生徒に知らせる。
- ・人間関係がうまくいくように生徒に伝えたり声かけをしていく。
- ・個人のスタイルでしていてもよい。わからない時に動いて聞きに行く。確認を何人かにしていく。
- ・人に聞けない生徒への促し方
- ・「ありがとう」の言葉、長いスパンで生徒を育てていく、仲間作り。

○評価について

- ・確認テストは、毎時間しなくていいのか。
- ・確認のレベルが分からない。文章とかの確認はどのようにするのか。
- ・確認テストについては、何をめざして確認テストを作成するのか。

○生徒の状況

- ・内容が複雑になると生徒の動きが活発になる。
- ・作業、実験、観察がグループで活動。自然と助け合っている。他教科でもその成果がみら

れる。

- ・教える生徒、教えられる生徒の人間関係はどうか。
- ・グループをつくっている。予習復習をするようになる。人に教えるために分からないと人に迷惑をかける。
- ・教科書の問題は生徒同士でできる。
- ・友達の時はいかに聞くことに集中する。
- ・発展問題を出来た子はしている。
- ・自分に合う説明ができる生徒がいない場合がある。
- ・説明できる生徒が固定化されることもある。
- ・相手の勉強をさえぎってまで質問していいのか。
- ・勝手に教えていいのか。「分からない」にの「分かる」と言ってしまう。どこがわからないのかわからない。
- ・グループのでき方において、ケンカした後などに友達に聞けない。
- ・グループの作り方をかえたり・・・
- ・3年で受験前になると、もう一方の生徒は自分の勉強をしたくなる。
- ・聞かれるのが苦痛になってくる生徒もいる。
- ・三年生なので、これでやってこられた。「学び合い」のルールがきちんとできていた。
- ・Mくんは今日の授業で頑張っていた。授業に参加していた。

2 研究主任発！『学び合い』通信の発行

『学び合い』通信

H23. 4. 28 文責：吉岡 修

『学び合い』授業について

『学び合い』授業の導入の理由は、「生徒の理解力があがる」という実践データのもとに、生徒の学力の向上を行うことが最大の目的です。『学び合い』授業は、授業中に子供同士がお互いに教え合って、教師の設定した課題を達成していく方法です。生徒同士の教え合いによって、コミュニケーション能力の向上にもつながります。また、かならず、「全員が課題を達成すること」を一番大事にしていきます。そのため、分からない生徒をそのままにしないようにします。速く出来ている生徒については、他の生徒に説明することで課題に対する理解を深めるようにします。この活動によって人間関係を深め学級の雰囲気向上にもつなげるようにしていきます。

【『学び合い』の基本の3つの考え】

『学び合い』授業は、3つの考えのもとに行っています。

- ・学校観「学校は、多様な人とおりあいをつけて自らの課題を達成する経験を通して、その有効性を実感し、より多くの人がある自分の同僚であることを学ぶ場」
- ・子供観「子どもたちは有能である」
- ・授業観「教師の仕事は、目標の設定、評価、環境の整備で、教授は子どもに任せるべきだ。」

数学科（担当：吉岡）

1年C組、3年A組、3年B組の数学の授業で『学び合い』学習を行っています。

『学び合い』授業を行う最初の授業で以下の話をしました。

【『学び合い』授業の最初の1時間目の教師の語り】

『学び合い』授業では、自分自身が主体となって授業に取り組むため、学習意欲の向上につながります。課題解決が難しいときに、一人（教師）に聞くだけでなく多数（生徒）の人に聞くことができるというところです。自分が聞いて理解しやすい人から聞くため、より分かりやすいところが一人ひとりの主体的な学習を育みます。

通常の授業の問題演習（15分程度）では、教師の机間指導で多くて5人ぐらいの生徒にしかな説明ができないため、すべての生徒に説明して理解させることは大変困難なことです。しかし、『学び合い』授業では、速く課題を解くことができた人が学級に15名いた場合は、15名が説明することができるため、理解出来ていない人が1時間の授業の中できちんと聞くことで課題を解決することができます。速く出来た人は、他の人に何度も説明するため自分自身の理解も深まり、数学的な考え方が定着します。3人に聞いても解決できない場合は、先生のところに聞きに来ることもできます。

『学び合い』授業の中で、「教える人」「教えてもらう人」「一緒に学ぶ人」など様々な立場で、お互いが認め合い、より良い人間関係が作られます。この関係が自己存在感を高め、孤立感を減少させます。

【1時間授業の流れ】

(1) 導入（5分）

課題「乗法の公式」と目標「全員が数学の教科書のp14～15の例、問いを解くことができる。」を黒板に提示します。「全員が」ということを強調します。前回の反省として、「3人が全部解くことができなかった。」「課題を速く解き終わった人がどうだったか。」などを確認して、全員が解くことができるようにすることを促します。

(2) 展開（40分）

① 生徒の活動

生徒は、基本は個々人で課題解決をしていきます。課題の解決が難しい場合に、生徒同士で教え合う活動を行います。教え合うときに、グループを固定化しないで、説明が聞きやすい理解しやすい生徒のところに行きます。そのため、自由に移動して聞くことを認めています。

② 教師の活動

教師が教えることはしません。教師が教えると、生徒は教師を頼って受け身になってしまいます。生徒同士が主体的に課題に取り組み、生徒同士が教えあったりするような集団ができるようになることを考えます。

教師は、生徒の机をまわりながら、ちゃんとやっている子、学び合っている子の方に目を向けて、うまくいっている子がどの子なのかが分かるように見ていきます。教師が生徒を「その説明はすごい。」「なるほど～」「分かりやすい」と誉めることで、「ここにすばらしい情報源がある」ということを全体に伝えます。これによって、生徒がどの場所に動いた方がいいかを判断できるようにします。また、生徒同士で間違った方向に考えが進んでいる場合は、「ここはどうか。」というささやきによって、さらに教え合いを深めたり、他の生徒に聞きに行き解決することを促します。生徒の全体の取り組みや課題解決で間違った方向に行っている場合は、その課題点を全体に投げかけていきます。

(3) 授業の評価（5分）

生徒に「今日の課題を解くことができたか。」を挙手をさせて全員ができたかどうかを確認をします。分からない生徒がいた場合は、「どのようにしたら全員が時間内に理解することができるようになるか。」を生徒全員に投げかけます。「速くできた人はどのようにすればいいか。」「分からない人は、分からないままにしていないか。」などの意見をあげて、生徒一人一人がどう取り組めばいいかを確認します。また、課題の内容について、「ノート書き方はどうか。」「他の人のノートを写しただけで終わっていないか。」「本当に理解するためには、どうすればよいか。」などの意見をあげることで、次の授業で生徒の取り組みが活発になるようにします。

【確認テスト】

1つの単元の中で3回ほど確認テストを行います。問題数は10問程度で、目標は「全員が80点以上を取る。」というものです。全員が80点以上とれない場合は、『学び合い』授業で、何が足りなかったかを考えるようにしています。例えば、「乗法の公式では、公式の意味を理解していたのか。」「理由を理解せずに答えだけをノートに書いて満足していなかったか。」などの意見を出して、『学び合い』授業をさらに高めていき、次の確認テストで「全員が80点以上を取る。」という目標を達成できることをみんなで確認します。

3 生徒アンケートから実態を知ろう！

「学び合い」の授業アンケート

() 組 () 号 ()

下記の項目に○をつけなさい。

4 (そう思う)、3 (だいたいそう思う)、2 (あまり思わない)、1 (思わない。)

- | | | | | | |
|---|-------------------------|---|---|---|---|
| ① | 「学び合い」をする授業は楽しい。 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ② | 「学び合い」の授業はわかりやすい。 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ③ | みんながわかることは大切だ。 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ④ | 「わからない」とみんなの前で言える。 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ⑤ | 「わからない」とみんなの前で言える。 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ⑤ | わからない事は恥ずかしいことではない。 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ⑥ | わからなくても友達が助けてくれる。 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ⑦ | 「学び合い」をしてクラスの友達と仲良くなった。 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ⑧ | わたしのクラスには仲間がいる。 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ⑨ | 学び合いについての感想を書きなさい。 | | | | |

4 『学び合い』実践計画書を作成しよう！

【記入例】

『学び合い』授業 実践計画書

(数学) 科 (吉岡) 先生

(1) 担当学級 3-A、3-B、1-C
(2) 実施単元 <ul style="list-style-type: none"> ・1年 <li style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> 1, 正の数・負の数 2, 文字の式 3, 方程式 4, 比例と反比例 <li style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> 5, 平面図形 6, 空間図形 7, 資料の活用 ・3年 <li style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> 1, 式の展開と因数分解 2, 平方根 3, 二次方程式 4, 関数 $y = ax^2$ <li style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> 5, 図形と相似 6, 三平方の定理
(3) 実施内容 1年 <ul style="list-style-type: none"> ・各授業時間の問題演習 20分程度 ・各単元の章末問題の演習 3年 <ul style="list-style-type: none"> ・各単元の章末問題の演習
(4) 実施時間 1年 合計 65時間 / 140時間 <ul style="list-style-type: none"> ・各授業 約43時間 (128時限 × 20分 = 約43時間) ・章末問題 12時間 (6章 × 2時間 = 12時間) 3年 合計 12時間 / 140時間 <ul style="list-style-type: none"> ・章末問題 12時間 (6章 × 2時間 = 12時間)
(5) 設定理由 <p>数学の知識・技能の習得には、教師が生徒に教えることが不可欠であると考えている。そのため、授業の問題演習のときだけ『学び合い』を取り入れる予定である。三年生では、知識・技能の習得が難しくなるので、章末の問題演習のみに、『学び合い』を取り入れる予定である。</p> <p>問題演習においては、教師だけで問題を解くことができない生徒への支援に限界があるので、『学び合い』によって生徒同士の教え合いによって解くことが効果的と考えている。また、出来ている生徒も、他の生徒に説明することで理解力が深まると考える。</p> <p>第3学年、第6章の「図形と相似」の証明では、論理的に導くことが多いため、『学び合い』によって、複数の生徒同士の交流によって、多様な考え方を身につけることができると考える。</p>

5 授業で活用しよう！

月 日 () 教科 () 年 組		校時 単元・題材 授業者 ()	
授業参観視点表		本時の授業	
1	本時の課題が生徒にとって分かりやすいものになっているか。		
2	生徒が自分で考えたり、友達とお互いに学び合う時間が30分以上確保されていたか。		
3	生徒たちは、『学び合い』の時間、基本的に課題を追求し続けていたか。		
4	理解できている生徒はどのような行動をしていたか。		
5	理解できていない生徒はどのような行動をしていたか。		
6	自分の求める情報を探して、特定の人に関係なく関わろうとしているか。		
7	生徒の活動中、教師は、有益な情報を誰が持っているかをクラス全員に公開していたか。その際、クラス全体の作業を止めずにいたか。その公開の後に、生徒はどのような動きをしたか。		
8	多様な生徒に、一律の方法を強いていなかったか。		
9	授業の最後に、全員が理解できたかどうかの確認の時間を取っていたか。(まとめはいらぬ。) 生徒たちは授業途中に、互いに分かっているかいないかの確認をとっているか。		
10	本時の学習目標を全員が達成することができたか。		
気づき	(今後の研究に役立てたいと思いますので、ご意見等をお願いします。)		

5 保護者の理解を得よう！

- 年3回の授業参観(5月、6月、11月)では全員『学び合い』授業をする。
※ 『学び合い』授業参観の感想をすべて公開する。
- 学校通信「シチメンソウ」に『学び合い』コーナーを設け、授業実践を紹介する。

6 年間2回のQUテストと学力調査を生かす！

- (1) QUテストを活用する…その1～担任が作成するQUを生かした今後の取り組み

Q-Uを生かした今後の取り組み

○学級での取り組み 1年 A 組 33名(男子 16名、女子 17名)

本学級は、「ゆるみの見られる学級集団」と判定されました。

担任から見た学級の現状は、小学校からずっと一緒に変わらず活動してきている。慣れている

ので孤立する生徒はほとんどいない。集団活動など学級としてまとまって活動する雰囲気がある。しかし、集団活動では、慣れからくる気配りが不足で、自分のことばかり主張し周囲に迷惑をかける言動や行動がある生徒が多く、意見も自分本位の内容であることが多い。

今後の取り組みとして、朝や帰りの集いなど学級集団で活動を行う場合は、内容を明確にし、会の中では人の話を聞く態度や環境を作る。また、学級での話し合いや意見交換をする場合は、意見を発表できる進行や環境、雰囲気を作り、学級が一体化できるようにして取り組んでいきたい。

授業を通して、「学び合い」での人と人との関わりを充実させるために、学活や道徳等を活用し、クラス内でのコミュニケーション能力の向上、他の人のことを考えた言動・行動ができるような活動を取り入れていく。

新しいことを学びたい、もっと知りたいという意欲は学級として高い。生徒たち一人ひとりには承認感も高く意欲的なのでこの気持ち維持向上させていく取り組みをしていく。そこで、係り活動や専門部の活動の役割を全体で確認し、各役割を生徒たちにバランスよく割り当てる。活動後に取り組んだ内容とともにルールに沿って活動できたか、各役割の責任を果たせたかを認めることを中心に評価していく。そうすることで学級集団は建設的に大きくまとまり、その中で生徒たちの学校生活意欲も高く維持されていくと考える。

○授業での取り組み(『学び合い』活動を生かした取り組み)

授業の「学び合い」活動では、自分から進んで誰にでも教える生徒は少ない。仲が良いもの同士が、グループを作り、そこで教えあったり、聞きあったりしている。他のグループとの交流が少なく、全体に広がりが無い。

教師としては、授業の中で個人からの良い意見や発言を引き出したり、全体に提示したりすることで、学級全体の雰囲気が向上して、不満足や非承認群に入っている生徒たちが、「学び合い」の中で学習へ取り組む気持ちを少しでも良くすることができるように関わっていきたい。

(2) 保護者あての資料

保護者 様

佐賀市立東与賀中学校 研究部

Q-Uテストの理解と実施に向けた資料

I Q-Uテストについて

1 Q-Uテストの活用状況

「Q-U」は近年、日本の全都道府県の半数以上の県や市の教育センター、及び教育委員会で研修会が毎年実施されています。

佐賀市教育委員会では、平成20年度より市内全小学校で予算化して実施しています。

2 Q-U (Questionnaire-Utilities) の開発経緯

① 社会を含めた学校教育の課題から

○1980年代…中学、高校が荒れた時代と言われています。その頃の学校は、対処的生徒指導（注意や強い指導＝力）が主流だった時代と言えます。もちろん、学校教育で子供たちが間違いを犯したり、他人に迷惑をかけたりした場合に正すことは大切であるため対処的生徒指導は重要な生徒指導の手法です。ただし、対処的生徒指導だけでは結局、真の問題解決にならず、問題を深く沈み込ませることになります。

○1990年代…平成3年から4年にかけて、山形県をはじめ地方でのいじめや自殺が続出しました。文部省（現：文部科学省）はいじめ防止月間を指示したり、教育相談システムの検討も指示したりしました。全国各地の教育現場からは、子供たちの日常観察の他に、子供を知るテストがほしいと要望が出てきた時代です。

○2000年以降…要因は多種多様であり特定できるものではありませんが「すぐキレる子ども」と社会で取り上げられた、「不注意」「多動性」「衝動性」と言われる子どもたちが教育現場でも認知されるようになりました。これらは、近年、時代の急速な変化とともにあらわれた子供というわけではありません。

○不登校等や子どもへの対応…不登校の児童生徒数は13万人（＝2年連続増、中学は34人に1人・文科省）でうち10万人が中学生です。この現状に際して、学校には、スクールカウンセラー、学習支援員、生活支援教員などが配置されるようになりました。不登校の児童、生徒数は三年連続で減少していますが、出現率で見ると顕著な変化はなく、実情は横ばいといえます。不登校の児童は、中学校でも不登校となる確率が高いといわれています。中学でも兆候は一年生で表れることが多く、こうした時期に「初期症状」を見逃さず、ケアに当たれば、効果は高いでしょう。学力不足の影響も無視できません。勉強についていけずに不登校となる子は多いもので早い段階で最低限の基礎学力を身に付けさせることも有効な対策です。もちろん、不登校は「悪」ではありません。「防止」という考え方に違和感を覚える人もいるかと思いますが違う分野で自分を輝かせられる子には、学校以外の選択肢が当然あっていいと考えられています。しかし、学校に行きたいのに、さまざまな理由で行けない状態になる子が多くいます。不登校になってからでは、救うのは困難で多くの努力も要します。事後対策の充実は重要ですが、抜本的な未然防止策への取り組みも必要となります。

以上のような教育現場の課題等から子供たちの日常観察（見取り）の他に、子供を知

るテストがほしいと要望が教育現場から多く寄せられるようになりました。従来の心理テストはありますが、項目数が多く、教師が忙しい中でも使えるものを、という要望の元、Q-Uの開発が進められています。

② 「Q-U」が広く活用されだした理由

現在、多くの教育機関で活用されている理由は次の通りです。Q-Uを用いることによって、不登校にいたる可能性の高い児童生徒、いじめ被害を受けている可能性の高い生児童生徒を早期に発見できます。同時に、学級集団の状態を分析することができ学級崩壊にいたる可能性が診断できる唯一の尺度だからです。

[学校現場で活用されている理由]

- ・児童生徒に短時間で実施できる
- ・児童生徒の自尊心やプライドを傷つけない質問内容である
- ・集計結果が図表化され結果を理解しやすい
- ・教師が「Q-U」の結果を活用する際にも、心理学の専門的な知識を必要とせず、日々の教育実践に活用しやすい
- ・学級集団の全体像を把握することができ、校内研修などで教師同士が学級経営について検討する際の資料として活用しやすい。

つまり、目の前にいる子供たち一人一人が持っている潜在的、顕在的な良さや長所を伸ばすためには、早いうちに見通しを立てることが求められます。これからの学校教育は、良さや長所を伸ばしながら自己実現を支援していくことが大切とされています。このことから、教育現場には非常に有用性があると認知されていることが分かります。

3 「Q-U」とはどのようなものか

① 「Q-U」の構成

「Q-U」は2つの心理検査から構成されています。

「いごちのよいクラスにするためのアンケート（学級満足度尺度）」

「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート（学校生活意欲尺度）」

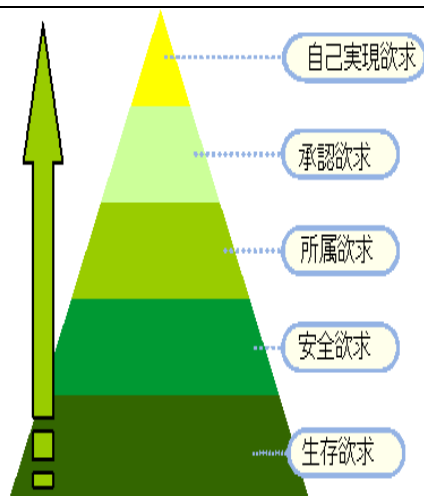
この2つの心理検査から教師は子どもたち1人ひとりについての理解と対応方法、学級集団の状態と今後の学級経営の方針をつかむことができます。

② 「Q-U」は標準化された心理検査

「Q-U」は発行前に総計3万人の児童・生徒を対象に事前検証を行っており、その結果日本テストスタンダード委員会の審査基準を満たした標準化された心理検査として認定を受けています。標準化されているとは、心理検査の内容が妥当であり、また、実施のたびに結果が大きくぶれない信頼性があることが、事前に検証されているということです。検査結果を判定する基準が統計的に明らかにされ、信頼性と妥当性が保証されているため、公的な資料としても活用することができます。

※ 理論的背景となること

第五段階として「自己実現」の欲求。自己の能力、可能性を發揮したり、創造的活動や自己の成長を希求したりしようとする。自分らしく生きたい、真なるもの、善なるもの、美なるものを求め、人の役に立ちたいと願ひ、社会的自己実現を図ろうとする心情。



第四段階は「承認」（自我・自尊）欲求。自分が周囲から価値ある存在として認められ（褒められ）、尊敬されることを求める欲求。この欲求も上記と同じ理由で思春期に特に強くなります。学級の中で自分は認められている、必要とされているという思いを求めている。学習活動で活躍の場が得られない児童生徒は外の場面でこの欲求が満たされるような配慮が必要。

第三段階は「所属欲求」。集団に帰属し、仲間として受け入れられたい、他人と関係をもちたいという欲求。仲間がほしい、愛されたいという欲求。小学校高学年から中学・高校にかけて、思春期に入ると親からの自立が発達課題として表れる。第二次反抗期で親を否定するが、まだ一人では立てないので仲間を必要とする。だから、クラスで無視されるようなことは非常に辛い。仲間からの「シカト（無視）」よりは「パシリ」を選択する。共感的人間関係が形成された学級づくりが必要。

第二段階は「安全欲求」。自分の存在や生活上安全や安定を求める欲求。死んだり、怪我したりしたくないという欲求。いじめや虐待を受けていれば、勉強など自己実現の欲求はわからない。

第一段階は「生存欲求」。食欲、睡眠欲など生命を維持するための欲求が満たされた時に次の欲求にうつる。

③ 「Q-U」でがわかること

子ども個人と、学級集団の情報から、不登校、いじめ、学級崩壊などの問題に対応するデータが得られます。

- ・ 不登校になる可能性の高い子どもはいないか
- ・ いじめ被害を受けている可能性の高い子どもはいないか
- ・ 各領域で意欲が低下している子どもはいないか
- ・ 学級崩壊に至る可能性はないか
- ・ 学級集団の雰囲気はどうか

以上のような、情報が得られます。つまり、現在学校現場で深刻な問題となっている不登校問題、いじめ問題、学級崩壊の問題に対応するデータが得られるのです。

④ 「Q-U」は具体的にどのような目的で使用されるのか？

代表的には、以下の4つです。

1. 不登校の予防として
2. いじめの早期発見、予防として
3. 学級崩壊の予防として

4. 教育実践の効果測定に

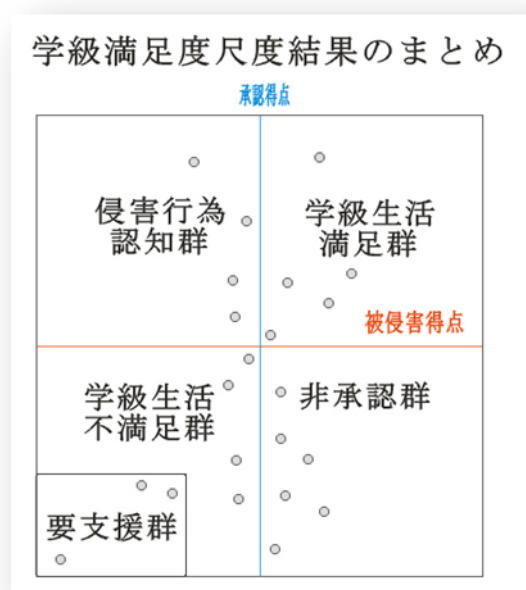
⑤ 実施の方法・結果の採点集計方法

実施は10分から15分で完了します。朝や帰りの会などの時間を用いて実施できます。集計はコンピュータによる詳細な分析・集計が得られます。（採点処理期間は1週間程）また、先生による手採点集計も可能です。

結果を理解するのに、心理学的な専門知識は必要としません。結果は図表化されますので全体のイメージからつかみやすく工夫されています。

⑥ 具体的にQ-U結果の例を見る

上記の図は、学級満足度尺度の結果をまとめたデータのイメージ図です。具体的には下記の図は、座標となっています。横軸が（ここでは赤線）被侵害得点、縦軸（ここでは水色の縦線）が承認得点を表しています。アンケートを採点集計し、児童・生徒ひとりひとりについてこの座標の該当する箇所に出席番号かもしくは名前をプロットしていきます（下記では、グレーの○印で示しています）。クラスの全ての児童・生徒のプロットが完了したら、個々の児童・生徒が、どのカテゴリにプロットされたかを確認します。縦軸は、承認得点で「自分の存在や行動がクラスの仲間や教師から承認されている」という感じている度合いを示しており、軸が上へいくほど、その度合いが強い（承認されているという自覚が強い）こととなります。横軸は、被侵害得点で、クラスへの不適応感やいじめ、冷やかしなどを受けていると感じている度合いを示しています。軸が左へいけばいくほどその自覚が強いこととなります。



上記の集計表から、児童・生徒個々人の状況を把握します。

それぞれのカテゴリの簡単な説明は下記の通りです。

<学級生活満足群>

学級内に自分の居場所があり、学校生活を意欲的に送っている児童・生徒

<非承認群>

いじめや悪ふざけを受けてはいないが、学級内で認められることが少ない児童・生徒

<侵害行為認知群>

他の児童となんらかのトラブルがある可能性が高い児童・生徒

<学級生活不満足群>

耐えられないいじめや悪ふざけをうけているか、非常に不安傾向が強い児童・生徒。特に要支援群の児童・生徒はその傾向がさらに強く早急な支援が必要。個々人についての確認

と共に、クラス全体としての傾向を、上記プロットの分布傾向からつかみ取ります。分布パターンについては様々ですが、特に代表的なパターンとしては、「右上に集まった分布」「縦に伸びた分布」「横に伸びた分布」「斜めに伸びた分布」「拡散」などです。クラス傾向や、今後のクラスの雰囲気推移が予測できます。学級崩壊の早期予防・対策などに効果的です。

II 東与賀中学校の学校づくりと「Q-U」の機能的有用性

1 学校教育目標「心豊かで、たくましく生きる生徒の育成」について

「心豊か」とは、一人ひとりが学齢に応じた自己実現に向かうために様々な学習に対して主体的に取り組んだり、先人の功績や地域の伝統などを大切にしたりしながら人との関わりの中で知識や見識、及び良心を育み成長していくことです。その「心豊か」を一人ひとりに育むことで社会の変化にも柔軟に対応しながら社会に貢献できる「たくましさ」を備えた生徒を育てるという意味を含んでいます。

この学校教育目標に迫るために「楽しい学校（夢を語れる学校、夢を語る学校、心地よさであふれた学校）」という学校経営方針を打ち立てています。

さらに、本学校経営方針に迫るために本年度の教育の重点目標を設定しています。

(1) 生徒指導の充実と強化 積極的な生徒指導←教育相談の充実／生徒指導協議会の充実／スクールカウンセラー、サポート相談員／学習支援員との連携
(2) 学習指導の充実・自ら学ぶ意欲の育成 学ぶ楽しさあふれる教室 ← 『学び合い』を取り入れた指導法改善 →楽しくわかる授業・学ぶことの楽しさ →本物との出会い（芸術教科等）
(3) 道徳教育の充実 地域教材を開発したり、地域人のゲストティーチャーを仕組んだりしながら、これまでの道徳を深め広げる手だてを仕組む。
(4) 生徒会活動の充実 校外の活動に出番・役割・承認のシステムを構築し、地域が応援できる開かれた学校づくりの屋台骨となる生徒会活動を開発的に仕組みながら充実させていきたい。
(5) 特別支援教育の充実 個々の生徒の実態に応じた支援を仕組む。
(6) 人権・同和教育の徹底 佐賀市の取り組みでもある「命・いじめを考える日」を学校内でも充実させていきたい。そのために、身近な人からの話や、生徒会活動「いじめ撲滅運動！」を人権・同和教育の視点に価値づけしながら一人ひとりの生徒が自分を見つめたり、周囲の心情を感じたりすることができる「心豊かさ」を育みたい。
(7) 教育環境の整備 「割れた窓ガラス理論」を日々実践できる学校集団を構築したいと考える。小さな窓ガラスを割れたままにしておくと、個々では何でも許されるという信号を送り、そして地域全体が荒れる。そこで、小さな落書き、はり紙でも近隣の方が声をかけあつて直すということを繰り返す。そうすることによって改善される、という意味を理解

実践できるように働きかける。

(8) 体験的な活動の重視

S Lタイム（総合的な学習の時間）キャリア学習を開発的に進め、達成感や成就感を一人ひとりが持つことができるように構成する。

(9) その他

食育や防煙教育、情報リテラシーなどこれからの時代をたくましく生き抜く体力と知力と精神力を一ひとりの実態に応じて身につけることができる教育を構築していきたいと考える。

合わせて、市民性を育み教育の実践、及びまなざし運動の実践の視点からも学校の教育活動内に地域や小学校との連携を広く設定し、学校、家庭、地域がそれぞれで育てるのではなく、連携の中で開発的に育てることを踏まえた学校づくりを進めていきたい。

2 「Q-U」の機能的有用性

義務教育は9年間ですが、中学校生活は3年間しかありません。しかも思春期という人の成長の中では大変重要な時期です。心身ともに大きく成長しながらも「揺らぐ成長期」である思春期ですが、義務教育の後半である中学校時代だからこそ立派な大人の基礎を身につけさせたいと願うのは学校だけではありません。近年、学校教育では「幼保小中連携」が重視されるようになり、特に「幼保と小」「小と中」の連携を深めるよう様々な取り組みがなされています。これは、「小一プロブレム」や「中一ギャップ」「中二ギャップ」を減少させたいという願いと、幼保小中の10数年間の教育が連携または一貫することでより効果的な教育を施すことができるという視点に立っています。しかしながら、やはり学齢に応じた育ち方や年度内で取り組む教育活動は決まっており、その中で誰一人とて遅れることなく仲間と一緒に安心して安全な環境の中で学習する喜びを保障しながら伸びてほしいと考えています。

そうなること、一人ひとりにおける一年12か月の教育活動が効果的に進められていくことが望ましくなります。生徒一人ひとりはその個性の中で自己の良さを伸ばそうとします。しかし、その環境の中でうまく人間関係が築けなかったり、誤解を受けたりするとその効果は妨げられます。「それも勉強」という考え方もあり、その方が終盤効率を上げることもあります。ただし、それは、大人がしっかり身取って見守りながらの環境下と言えるでしょう。急速な変化を遂げる現在社会ではそれもかなわぬことが多いと考えられます。私たち大人はみな、すべての子どもを「心豊かにたくましく生きる力を育み」たいと考えています。

このように、少なくとも9年間の系統的な育みの中での中学校3年間、その中の一年一年を大切にしたいと考え教育活動を仕組むためには、生徒一人ひとりの内面に混在する課題や問題を早期に発見し解決に向かうための手だてを仕組まなければなりません。また、そうでない生徒にもさらに伸びる手だてを仕組みたいものです。そのような教育理念の中で科学的根拠に基づくデータを活用して一人ひとりの実態に合う教育活動を仕組むことができれば、生徒一人ひとりを学校の教育目標や社会、家庭の願いに迫ることができるのでは考えます。

3 「Q-U」の具体的な活用方法

研究部を中心に「Q-U」について平成21年度は下表のように計画立案している。

月	校内研究との連動	備考
4	各教科における『学び合い』の年間計画立案と学級経	○ 必要に応じて、家庭を

	営方針の計画 ※一人ひとりの観察と教科担任、部活動顧問等との報連相、及び家庭訪問等から情報収集による実態把握	連絡しながら教育活動に生かすようにする。
5	修学旅行他での活動を身取りながら関係職員等との報連相による把握 ※「Q-U」の分析による裏付けと課題発見、及び手立ての仕組み	
6	学校生活日常での観察と一人ひとりの実態に応じた手立ての仕組み	
7		
8		
9		
10		
11		
12		
1		
2	※第二回「Q-U」による比較検討	
3	次年度への引き継ぎ	

各月の校内研で「Q-U」データを参考にした生徒の支援体制を協議する

4 「Q-U」の今後の活用について

学校としては、予算化できるように佐賀市へ働きかけをしたい。しかし、予算化が期待できない場合を想定してPTA会費に予算計上をお願いしたいと考えている。回数は年間2回(5月下旬, 3学期)を予定したい。

① 佐賀県学習状況調査を生かす！

平成22年度 学力向上対策シート

(2)年 教諭(○○ ○○○)

○現状把握

(1) 平成22年度佐賀県学習状況調査の状況から

観点別にみると、本校の生徒は、県と比べると、正答率は「見方・考え方」では0.5ポイント、「知識・理解」では0.2ポイント下回っており、「表現・処理」では0.2ポイント上回っている。しかし、要努力の生徒が、「見方・考え方」で0.8ポイント、「知識・理解」では1.6ポイント上回っており、「表現・処理」のみ0.1ポイント下回っているがその数値は低く、個別の指導が必要な生徒が佐賀県全体平均よりも多いことが伺える。

領域別にみると、本校の生徒は、県と比べると、正答率は「数と式」では1.8ポイント、「図形」では0.6ポイント、「関数」では1.8ポイント下回っており、「資料の活用」では6.7ポイント上回っている。観点別と同様に、要努力の生徒は、「数と式」は1.4ポイント、「図形」は2.6ポイント、「関数」は0.9ポイント、「資料の活用」は23.9ポイント、すべての領域で上回っている。

○主な取組

(1) 各教科・クラス・学年の課題

1年の復習から再度指導する必要のある生徒が、クラスに4、5人いる。その授業時間の内容を教えるに至らない場合がある。

(2) 改善に向けた取組

- ・毎週末に課題プリントを出し、1週間の授業内容を振り返るようにしている。
- ・毎時間の最初に「魔法の1分間」という音声計算トレーニングを行う。
- ・問題演習では、さきに終わった生徒から自由に教えてもらえるようにしている。

Ⅲ 平成23年度の『学び合い』より

1 1年生社会の授業で実践

(1) 1時間の流れ

時間	学習活動	教師の支援
0～10分	1 確認テスト	机間巡回しながら、正解の解答にはその場で○をつけていく。
10分～45分	2 『学び合い』をする。 ○生活班グループにする。 ○グループで力を合わせ、課題解決する。 ○グループでの課題解決が困難な場合は他のグループに遠征する。	○課題解決が困難な生徒やグループにはヒントを与えたり、よい解答をしている仲間を紹介したりする。
45分～50分	3 次時確認をする。	○確認テスト事前学習プリントを配布する。

(2) 社会科における『学び合い』の進め方

① 生徒の学習進度はさまざま！？

1年生社会科では、いわゆる1時間単位での授業ではなく、定期的に10時間分や15時間分といった大単元でのワークシート配布により、生徒は学習します。つまり個に応じて学習進度が異なります。例えば、AさんはC単元の2/9あたり、BさんはD単元の3/5あたりをそれぞれが学習しているということです。ちなみに、学習進度が速い生徒は時折周囲を見渡し、困っている仲間の近くに行き専属の先生になります。困っている生徒は専属の先生と一対一で問答をしながら懸命に課題に取り組みます。

② 確認テストについて

確認テストは授業のはじめに実施します。事前に確認テスト対策プリントを配布し家庭学習を促すと同時に、基礎基本的な学習内容の定着を図る手段とします。

進度はさまざまですが、「ここまでは進んでいなければならない！」という単元を基準に確認テストが行われます。

③ 家庭学習や基礎基本的な学習内容の充実

社会科ではワークシートに沿って『学び合い』を進めます。学習への興味関心が深い生徒は、先に配布されたワークシートを家庭学習で進めます。もちろん、そうでない生徒もいます。「教える」「教えてもらう」という『学び合い』の目標が達成されれば達成されるほど、家庭学習の充実が図れ、基礎基本的な学習内容の定着も図ることができます。

(3) 学習指導案について

① 指導案の書き方に関すること

生徒の学習進度が異なるため、展開は特に学習内容にふれていません。指導上の留意点に視点を置いた記述にしています。

(4) 授業者の自評

① 個と個のかかわりを太くすれば学力は向上する！

ワークシート主体のため、まずは「こなすこと」が授業の目標となってしまうがちです。自分の進み具合よりも、仲間の学習に気を配ることができるようになれば、「教えてもらう時に気持ち良く教えられるように分かるようになっておかないと…」や「分かってもらえるようにしっかり理解しておこう！」といった気持ちが増し、予習復習を自主的にするようになります。つまり、「家庭学習！家庭学習！…」と目くじらたてて言わなくともすみます。

② ワークシートの工夫

ア 個のレベルに応じた課題の設定

原則として小単元につき1枚から3枚くらいのワークシートを構成していますが、そのワークシートの内容がレベルの応じた段階にしたらよいかと思います。つまり、超基礎基本的な内容でこれだけは押さえてほしいという課題、ちょっと詳しいところまで抑えてほしいという課題、発展的な内容に挑戦してほしいという課題、という感じです。分かりやすく言えば、「社会が嫌いな子は好きになるレベル」、「社会は好きだけど、点数が伸びないレベル」、「もっと得意になりたいレベル」、「先生を超えたい！レベル」でしょうか。

※「先生を超えたい！レベル」が去年は出現し、実際に授業をしてもらいました…

イ 的確で短い説明ができるように

社会は重要語句とともに、事象の説明や解説が重要です。できるだけ短く、分かりやすい説明が記述できるようなワークシートの工夫がカギかと思います。

③ 『学び合い』でこんなふう育てたい！というビジョンを常に持つこと

〈例として…〉

1年生では、ワークシートの取組み方や確認テストで良い点数を取る方法、教えること、教わることの大切さを重視します。

2年生では、分かりやすく教えるために、や気持ちよく教わるためにはどうしたらよいかを重視します。

3年生では、学習内容が深く濃くなります。上位の生徒にはあえて一斉授業をすることで、他の仲間への教え方に効果が上がる場合があります。つまり、『学び合い』で主体的な学習態度が育っていますので、一斉授業も受け身ではなくなります。

2 数学における『学び合い』の進め方

東与賀中学校 吉岡 修

【授業の流れ】

- 1, 説明 (5分)
- 2, 自力解決 (5分)
- 3, 『学び合い』活動 (30分)
- 4, 確認テスト (5分)
- 5, 答え合わせ、教師の語り (5分)

【板書】

課題

生徒の問題演習

目標

教師の説明

確認テスト
の範囲

【板書の各内容の例】

- 課題：全員が教科書P60の問題を解くことができる。
- 目標：因数分解を使って二次方程式の計算ができる。
- 確認テスト範囲：教科書P60

(授業後の板書)



行って、ファイルに閉じさせる。

二次方程式と因数分解①

3年 () 組 () 号 ()

1, 次の方程式を解きなさい。

- (1) $x^2 + 7x + 12 = 0$
- (2) $x^2 - x - 12 = 0$
- (3) $x^2 + 3x = 0$
- (4) $3x^2 = 7$
- (5) $x^2 + 10x + 25 = 0$

【授業風景】

3, 『学び合い』活動



3, 『学び合い』活動（黒板での問題演習）



黒板で解いた問題の所に、生徒が自分の名前を書きます。他の生徒が、教えてもらいにきたり、間違いを指摘したりします。

4, 確認テスト



【1学期の授業を通して『学び合い』に関する教師の感想】

- ・『学び合い』のねらいは、生徒全員が主体的な活動をするためです。グループのように見えますが、個別学習であると考えています。それぞれの質問するところ、説明の仕方が、多種多様であるからです。
- ・以前、私が授業をしていたときには、寝る生徒、ただノートを写すだけの生徒がいましたが、そういう生徒はいません。
- ・授業では、確認テスト5点をとるのが目標です。「全員で5点をとる。」という意識を持たせています。
- ・まず、個別学習を行い、それで分からないところを聞いたり、分かっている人は説明することで高められると考えています。
- ・『全員で』を強調することで、学習を通して、学級の間関係づくりを向上させるねらいで取り組んでいます。
- ・授業中の教師の役割は、生徒同士をつなげることや生徒の意欲を喚起することと考えています。
- ・授業の中で、kは数学はクラスで一番低い。その子が、「なんでこがんなつ」「わからん。」「教えて」から、iが教えることから、学び合いが盛り上がりました。これで、いけると感じました。
- ・しかし、kkのグループのように停滞しているところもある。このグループから離れた生徒もいる。このkkが積極的に動いてくれることを期待しています。
- ・女子では、t、kのグループが比較的に理解力があるので、もっとみんなのために、動いてほしいと思っています。
- ・b、kのグループは、お互いに理解力が低いので、もっと動いて情報を得てほしいと思っています。
- ・生徒が、確認テストで5点を目指す意識は高まっています。しかし、グループが固定化して、学級全体で生徒同士がつながるに至っていません。まだまだ、教師が生徒をつなげきれていないと思っています。さらに、生徒に「全員で」ということを語っていく必要があると考えています。